

古英語の本文批評と *Beowulf* (13)

網 代 敦

前号では Nickel (1972) から Fulk (1997) までの古英語の本文批評の論争史を年代順に追った。今号ではそれ以降の主張の展開内容を、前号に倣って conservative (C)、interventionist (I) を示しつつまとめることにする。(-) は中立の立場とする。尚、Birte Kelly (1983a, 1983b)²⁷⁴ と J.R. Hall (1994)²⁷⁵ については、先々の論のまとめの中で取り扱うことにする。

1999 : Manfred Görlach (-)

本論文²⁷⁶の最初で Görlach は、本文批評で決定すべきことは全て言語と関わりを持つものであるが、その内のいくつかは他の事柄と比べてより狭義の言語的論点に基づいているものがある(p.79)と述べている。この論文は、そのような決定の基礎と、その決定によって引き起こされる広範囲な影響について例証することを目的としている。取り扱っている対象は年代順に、古英語から非標準英語の Jamaican Creole に亘るテキストである。ここでは、2. A *Beowulf* Crux: *wundini golde* (pp.79-80) の部分のみに触れる。1382 行のこの‘crux’は詩の制作年代と

²⁷⁴ Birte Kelly, ‘The formative stages of *Beowulf* textual scholarship: part I’ in *Anglo-Saxon England* 11. Ed. by Peter Clemoes et al. (Cambridge: Cambridge University Press, 1983a) 247-74 and ‘The formative stages of *Beowulf* textual scholarship: part II’ in *ASE* 12, (1983b) 239-75.

²⁷⁵ J. R. Hall, ‘The First Two Editions of *Beowulf*: Thorkelin’s (1815) and Kemble’s (1833)’ in *The Editing of Old English*. Ed. by D. G. Scragg and Paul E. Szarmach (Cambridge: Brewer, 1994), 239-50.

²⁷⁶ ‘Linguistic Problems of Editing’ in *Beihefte zu Editio*, Band 14: ‘Problem of Editing’. Ed. by Christa Jansohn (Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1999) 79-88.

大いに関わる問題となっている。wundini の語形は 700 年ごろの古語形であり、それが後期 10 世紀の写本に保持されているという代表的見解を持っているのは、写本の読みを残そうとする C.L. Wrenn である。*Beowulf* は本来 Anglia 起源であると把握し、instrumental (or locative) として用いられる語形のこの wundini は、*Epinal Gloss* の binumini のそれに対応し、750 年以降には用いられない語形であるとする。よって *Beowulf* の制作年代は 8 世紀の半ば以降とは考えられない²⁷⁷ という。しかしながらこの見解は、あくまでも言語学的規準(“linguistic criteria”, p.80)の仮説に基づくものであると Görlach は考える。1382 行のこの語が、もし 1381 行の ealdgestreonum (‘ancient treasures’) と並列をなす語として捉え、wundnum という修正形を受け入れるとするなら、この Wrenn の仮説は重点を失うことになる。他の言語事実を精査したなら、異論の余地が生じるという一例が示されたものである。校訂における本文の決定要素となる基盤は「テキストの制作と伝達に関する知識と同時に、文法、文体、本文伝承の情報」(p.88)を総合的に勘案することが肝要であることが、Görlach の主張から改めて理解される。

2003 : Andy Orchard (穏健な I)

近年の多方面に亘る *Beowulf* 学を集成したといってもよい本書²⁷⁸は第二章 ‘Manuscript and text’ (pp.12-56)で、以下のような問題を扱っている。

詩の写本環境(manuscript-context)に注目しながら、第二章は写本本文が、校訂者(編纂者)によってどのように変更されてしまっているかの方法に論点が向けられている。写字生自身はしばしば現代の校訂者と同じような役割を果たしているように思える。写字生が犯しがちな誤り(その内のいくつかの誤りに関しては、写字生はそれを明らかに認識

²⁷⁷ C.L. Wrenn (ed.), *Beowulf with the Finnesburgh Fragment* (London: George G. Harrap, 1958), p.17.

²⁷⁸ *A Critical Companion to Beowulf* (Cambridge: D.S. Brewer, 2003).

し訂正した)を詳しく分析すると、過去に行われた推論による修正との優劣を示すことが出来る有益な目録を示し、新しい修正が提案される指針も与えることができる。(Foreword: looking back, p.9)

ここでは第二章の中でも特に本文編纂に関して取り扱った個所に目を向け、Orchard の見解をまとめておこう。但し、*Editing 'Beowulf': explaining scribal errors* (pp.49-54) はここでは取り上げない。

—*Editing 'Beowulf': from parchment to paper* (pp.39-42)について—

現存する古英語文献のどこにも見出されない語の高い割合での使用や、唯一の写本しか残されていないという、いろいろ問題のあるテキストの校訂本を作成する際に、『ベオウルフ』研究者は慎重な姿勢を取ってきた。そして詩の一連の編纂者にとって保守的姿勢の路線が主要なものとなってきた。このことは、Kemble, Thorpe, Grundtvig といった学者によって 19 世紀前半に初めて提唱された数々の修正を引き続いて受け入れる結果となっている。しかし、近年、アングロサクソン文学の本文批評とテキスト編纂に採用されるべき方法論に関する議論が見られるようになって来た。アングロサクソンの写字生は古英語の知識に関して劣っているといえども、現代のいかなる批評家の知識よりも勝っていたと主張する Eric Stanley (1984) のように、写字生によって残された読みを捨てることへの警鐘を鳴らす者と、Michael Lapidge (1991; 1993) のように古典のテキストの確立に十分に機能した路線に沿っての慎重を要した思慮深い修正を奨励する者との議論対立がある。Alfred Bammesberger (1980-) のようにほぼ毎年亘って、*Beowulf* に修正を行っている場合があれば、一方で John Niles (1994) や Kevin Kiernan (1981: rev. 1996) のように従来長いこと受け入れられてきた校訂者が介入した読み(editorial intervention)を犠牲にしてまで現存する写本の読みを保持しようとする場合もある。全ての今ある校訂本と推論による修正をカタログ化した比較した合注版(variorum edition: Orchard が'an

electronic text'として準備中)が是非欲しいところだが、数百の提示された修正があるにもかかわらず、相対的に言えば詩の基本的なテキストは Kemble の時代以来ほとんど変わっていない。(pp.39-40)

しかしながら、最も保守的な校訂本でさえも暗黙の内にいろいろな点において写本本文の変更がなされてきた。現代の慣例に従った行配列・大文字化・語分割・句読法が導入され、省略形が略さずに拡大されてきたが、残念なことに全く誤った効果を招いている場合もある。例えば、520b, 913a, 1702a に見られるルーン文字 (epel) はゲルマン的な文脈においては綴り化せずそのまま残して置いた方が意義があるとす。具体的な理由は述べられていないが、ルーン文字はシンボルとしてそれぞれ対象物を表示しており、読者側に 'decode' させるという詩人の意図がそこに含まれるからであろうと思われる。さらに、写本における句読点は韻律に基づいているので、統語的な意味が完結されていない不完全な一行末や半行末に来ることや、主語と述語動詞、名詞とそれに呼応する形容詞などが異なる半行に置かれた場合でも、その間に句読点が介入し文を分断してしまう場合がある。しかしながら、これらを統語構造に基づき現代的に句読化することは、写本の句読点の意義を反映するものではない。(pp.40-2)

—Editing 'Beowulf': saving the text (pp.42-44)について—

現代の慣例に従った行配列・大文字化・語分割・句読法が自由に、詩の中に組み込まれてきたとは言え、本文を構成するほとんどの文言においても、そのまま同じこの姿勢を当てはめることができる訳ではない。近年は、写本本文に与えられた昔からの推定による変更をそのまま受け入れることに異議を唱える傾向が出てきている。直接の写本環境を考慮する重要性と結びついて、近年広く用いられている *Beowulf* の校訂本は基本的に保守的なテキストとなっている。例えば、Mitchell-Robinson の *an Edition* (1998)、Kiernan の *Electronic Beowulf* (1999) がその例である。Mitchell-Robinson は「不必要な修正」と見なされるもの

は拒否しているものの、Orchard の計算によると、写本本文の変更あるいは写本本文への付加が総計 300 以上あるとされる。Mitchell-Robinson (1998) に提示された推定による修正は、*Beowulf* の両写字生が、無意識に転写間違い (mechanical copying-errors [(1) 個々の文字形の混同、(2) 読み飛ばしあるいは重字脱落による語の省略、(3) 重複誤写、(4) 音位転換]) を犯したとの想定の上に立っている。(pp.42-3)

より保守的なテキストを提示したのは Kiernan (1999) である。欠落したと考えられるような部分を補完するための数々の修正を拒絶している。Kiernan (1999) は、編纂上の介入の範疇を区別している。修復・復元 (restorations) と修正 (emendations) とである。前者は、「ある種の損傷によって写本から失われたものを復元するために、推論しようとする試み」であり、後者は「写本にはっきり見られるものを変更する、あるいは拒絶すること」を言う。Kiernan (1999) は 944 の初期の修復をリスト化し、124 の修復校訂を受け入れているが、91 の修正 (35 行につき 1 つに相当) しか認めていない。それ故、認識される頭韻・韻律の不備を正そうとして従来なされてきた多くの修正を受け入れてはいない。Kiernan (1981: rev. 1996) の論点は、意味が明確なら、頭韻・韻律の不規則性は受け入れられ得るというものだからである。Kenneth Sisam (1953) は、広範囲に亘る写字生の誤りの可能性を強調しているが、Kiernan (1981: rev. 1996) は Westphalen (1967) に従いながら、*Beowulf* の両写字生は自分たちの写本を照合点検し、訂正していたとする。写本中に見られる削除や書き込みの訂正は、両写字生の完璧を追求する姿勢と彼らの最終的な転写本の信頼性を示していると主張する。しかしながら、そうであったとしても現存する写本には欠点がないと断定するには難しいので、Kiernan (1981: rev. 1996) の主張の重さは少し異なってくるであろう。Kiernan 自身が提唱した修正は、種類においても本質においても他の校訂者と著しく異なることはない。その超保守的な校訂版 (ultra-conservative edition) においてさえ、*Beowulf* の写字生は上述の 4 つの機械的な無意識の転写上の誤りを犯し得るし、実際に犯したと

いう暗黙の容認がある。(pp.43-4)

—Editing ‘*Beowulf*’: the scribes as editors について(pp.44-8)—

Beowulf 写本の二人の写字生は、最初の詩の「編纂者(校訂者)」(“the poem’s first identifiable editors”, p.44)としての役をある意味で果たしていたと言える。自らが制作した写本の訂正を、上述の(1)~(4)に沿って行っているからである。写字生の訂正で一番多いのは、(1)「個々の文字形の混同」の場合である。(p.44-6) また写字生 A が転写したものに訂正を施した内のいくつかを、写字生 B がさらに訂正しているところがある。よって後者は写字生として年長者であり監督的な能力とがあるとされる。A よりも、より古風な筆跡をしていることからそれが裏付けられるであろう。Orchard の指摘によると、Kiernan (1981: rev. 1996)は写字生 B の役割をある意味で著者的(“quasi-authorial”, Orchard, p.46)であるとし、*Beowulf* 写本は今あるがままの叙事詩の原型を構成していると見なしている。一つ例を出して補足すると、写字生 A が転写した写本 160r17 行(1372 [Kiernan (1999), 1374]a)には、hafelan(‘head’) と nis(‘is not’)の間にコロンの間に挿入されている。これは両語の間に語が挿入されるべき印として写字生 B によってなされたものとされている(Malone, 1963)²⁷⁹。しかしながら訂正は行われていない。Kiernan (1981: rev. 1996) の見解は、写字生 B がここに一語(動詞の infinitive)の抜けがあることを認めてその場所に印をつけたまま、抜けた語を挿しなかったということはあり得ないとして、写字生 B は、その折手元に exemplar を持っていなかったと見る。Orchard は明らかにここには意味と韻律の断絶があるとしている。Kiernan 自身は、意味に関わる限りは動詞の infinitive をここに補う必要はないとする。その理由は、‘before he would want his head within’ と解釈でき、wille のみで、統語的

²⁷⁹ Kemp Malone (ed.), *The Nowell Codex (British Museum Cotton Vitellius A. XV, Second MS)*. Early English Manuscripts in Facsimile, 12. (Copenhagen: Rosenkilde & Bagger, 1963), p.68.

にも意味的にも充足しているからとする。(1981: rev. 1996, p.277, footnote 88) 但し、Kiernan (1999) では havenian ('to hold, grasp') という動詞を補っている。Holthausen⁸ (1948), Klaeber³ (1950)は beorgan ('to save')を補い、Kemble² (1837)に従った他の校訂者は hydan ('to hide')を、Gerritsen (1988)²⁸⁰, Bammesberger (1992)²⁸¹は helan ('to conceal')を提案している。この部分を 1368-1372 までに manuscript-context を広げて考えてみると、「テキストの聴覚的装飾」(“the aural embellishment of the text” p.48)がなされていることが分る。それらは、sustained-alliteration (5 行の内 3 行において h の頭韻がなされている。且つ、全行に h 音が現れる。5 行の内 4 行が語頭に s を持つ語で終わる)、end rhyme, assonance があり、これらから helan (この語だと“the aural embellishment”がさらに高められる)は妥当であると言えるだろう。Orchard は textual context を考慮することは大事であるが、manuscript context の観点からも、客観的なテキストの構成を導くことができるとし、Kiernan の見解に異論を呈している。(pp.47-8)

—Editing ‘Beowulf’: the case for continuing emendation (pp.54-6)—

従来、校訂上の関心になかった本文のさらなる修正の可能性が考えられる。例えば、33b の isig ond utfus ('icy and eager to be away')の isig の解釈である。A. Campbell (unpublished lecture) は写字生が l と s を混同して書き間違えたとして、本来は*ilig ('speedy')であったという推定形を提示した。古高地ドイツ語 ilig (現代ドイツ語の elig 'quick, urgent')と同起源であるとの説明も加えている。これなら utfus と文脈上合致するからである。Campbell の修正は純粋に語学的見地からのものであるが、古書体学の(paleographical)立場からの支持も提示できる

²⁸⁰ Johan Gerritsen, 'Emending *Beowulf* 2253—Some Matters of Principle. With a Supplement on 389-90, 1372 & 240', *Neophilologus* 73 (1989), 451-2.

²⁸¹ Alfred Bammesberger, 'Five Beowulf Notes', in *Words, Texts and Manuscripts: Studies in Anglo-Saxon Culture: Presented to Helmut Gneuss on the Occasion of His Sixty-Fifth Birthday*. Ed. Michael Korhammer et al. (D.S. Brewer, 1992), 250-2.

と Orchard は指摘する。即ち、両写字生は l と簡単に混同される long s を時折使用しているのも、これと l が書き間違えられたということである。この他、さらに注意が向けられるべき従来無修正であった部分にも、重字脱落(haplography: ex. s for ss), 重複誤写(dittography: ex. ss for s)などの観点から、再修正の機会が与えられるとする。(pp.54-5)

また、高画質のファクシミリの使用が普及可能になったことや、初期の転写本と諸校訂本を(年代順に)連続して比較することなどにより、さらに多くの推定による本文修正を促す可能性が生じる。唯一の写本しか残されていないということは、写字生の間違いや本文への介入の程度を知る上での妨げとなってしまうが、しかしながら、写字生が犯し易い間違いに関する糸口を追うことにより、また、他の古英詩において提案された修正形と照らし合わせ勘案することによって、新たな修正の提示にある程度の抑制をかけることができるようになる。推定による修正において、より広いコンテキストに目を向けようとしない近視眼的な姿勢になってはいけない。すべての推定形は、古英語の文体やテキストの構成などを基礎として注意深く検討される必要がある。(pp.55-6)

Kiernan に見られるような過度の保守主義には疑義を呈しながら、Orchard はより広い写本コンテキストの観点を導入し、本文修正の新しい試みの成果を与えている。

2003 : R.D. Fulk (I)

条件確立をし、一貫して本文介入の是を主張してきた Fulk の次の論文²⁸²を見てみよう。Fulk はアングロサクソンの学問において、フィロロジカルな論証における方法論の基礎についての議論がほとんどなさ

²⁸² 'On argumentation in Old English philology, with particular reference on the editing and dating of *Beowulf*' in *Anglo-Saxon England* 32. Ed. Michael Lapidge et al. (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), 1-26.

れていないと繰り返し指摘している。例えば、テキストは *liberal* に校訂されるべきなのか、*conservative* に校訂されるべきなのか、一連の論争はあるものの、個人的な単なる好みの主張を超えて、テキストの修正が必要であるかどうかを決定する際の原則について明確な議論がなされていないと述べている。(p.1) 確率性・確実性(“*probabilism*”, p.2)ということが古英語のテキストを取り扱うアングロサクソン研究の全領域に重要であると指摘する。この“*probabilism*”の無視・あるいは誤解ゆえに古英語研究におけるフィロロジカルな論証が被っている欠点の程度を示しながら、“*probabilism*”の重要性を具体化させることがこの論の目的となっている。(p.2) 以下の3点について論じているが、本稿では、1と2のみに触れる。

- 1 On Falsifiability (pp.3-9)
- 2 On the Pervasiveness of Probabilism (pp.9-16)
- 3 On the Interpretation of Statistics (pp.16-25)

1 について：

ここでは‘*poetic syntax*’に関する論争が扱われている。その対象は韻文において、名詞・形容詞・動詞・副詞相当語句・節などの一つの統語要素が同時に二つの要素として機能し一構文を作り上げる、*από κοινού* (共有構文)である。その一例として 1013-14a 行を取り上げている。

bugon þā tō bence blædāgande / fylle gefægon
 sat then to the bench glorious men / the feast rejoiced in
 (文字通りの訳は原筆者)

この個所はこれまでいろいろな解釈がなされてきたが、通例次のように捉えられていると Fulk は説明している。blædāgande は bugon か gefægon のいずれかの主語であり、blædāgande が具体的に指示しているもの (1017a の Hrōðgār ond Hrōpulf を指すと思われる)が、変則的ではあるがもう一方の動詞の主語であると想定される。Klaeber³ (1950)が

blædāgande の後に置いたコンマは、その前に置くこともできたであろう。これに対し、blædāgande が *από κοινοῦ* として用いられているとするなら、bugon と gefægon の共有の文法的主語と見なされ得る。このように解釈する者は、どちらにコンマをおいてもそれは誤解であると見なすであろう。ここで Mitchell (1980)²⁸³ と Mitchell (1999)²⁸⁴ の次の見解を引合いに出している。Mitchell はコンマの挿入は必要なしとする。ここにコンマを置くことは、本質的に決定し得ない統語上の問題に校訂者の意見を押し付けてしまうものであり、アングロサクソンの統語法が現代と同一であるかのように表してしまう危険性があるとする。これは詩的芸術効果(“poetic artistry”)を求めた“ambiguity”が意図されていると Mitchell は考える。これに対し、Fulk は *από κοινοῦ* であると言える説得性は見出されないという Stanley (1993)²⁸⁵ の反論を挙げている。これに関して、Mitchell (1999) の「見解の問題(“a matter of opinion”, p.478)」との言及を Fulk は引用する。(p.4) そして、この問題は個人の信念によるか否かとして解決できる問題ではないとする。そこで、probabilities の基となる「古ゲルマン語における語順と語強勢の関連」を扱った Kuhn の法則²⁸⁶を適用すると、*από κοινοῦ* は考えられるほど多くはないとされ、正当な確実性がなければ、*από κοινοῦ* という想定をテキストに押し付けることはできないと Fulk は判断している。(pp.5-

²⁸³ Mitchell (1980) に関しては、拙論「古英語の本文批評と *Beowulf*(8)」大東文化大学英米文学論叢第 44 号(2013), pp.46-51 を参照。

²⁸⁴ ‘*Apo koinu* in Old English Poetry’, *Neuphilologische Mitteilungen* 100 (1990), 477-97.

²⁸⁵ ‘*Από Κοινοῦ*, Chiefly in *Beowulf*’ in *Anglo-Saxonica: Festschrift für Hans Schabram zum 65. Geburtstag*, ed. K.R. Grinda and C.-D. Wetzel (München: Wilhelm Fink Verlag, 1993), 181-207. Stanley は手厳しく以下のように述べている。“I doubt if it provides an answer when a modern reader is unable to decide whether a clause goes with what precedes it or whether it goes with what follows it. In short, it is not a solution to a syntactical or stylistic problem, but a term used to conceal failure to find a solution.” (pp.181-2).

²⁸⁶ H. Kuhn, ‘Zur Wortstellung und -betonung im Altgermanischen’, *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 57 (1933), 1-103.

6)

批評的校訂本の目的はテキストとその audience の間の距離を調整することである。古英語のテキストに関し、現代の audience が十分に理解する上での障害は、次のような項目であると Fulk は断言する。①言語自体に親しんでいないこと、②写本によって伝達する際に伴う本文上の慣行、③中世紀の読み物に関する oral の性質、④綴りと句読法の特異性、がある。一般に *Beowulf* のような詩を読んだり聞いたりする中世紀的な経験を十分に踏みしめることは出来ないので、校訂者は詩の歴史的な文脈に忠実であることと現代の読者に読みやすいようにする必要性との間で妥協しながらテキストを作成している。よって、Mitchell (*Beowulf Repunctuated*, 2000) の句読法の規定は絶対的な必要条件とはならないと考えている。(p.8)

2 について：

Beowulf のような詩を編纂する際に、様々な付随的フィロロジカルな疑問にどう目を向けておくかが重要であると Fulk は述べる。それらは韻律分析の信頼性、多種多様な校訂本における句読法の目的、写本は転写であるか作者自身の手になるものかなどである。これらの疑問が事前に解決されなければならないので、観念的に中立の校訂者などはいないということになる。しかしながらこのような問題は、probabilities に訴えることなくしては合理的に解決され得ない。とは言え、こうした事柄に対する校訂者の姿勢を明示的に述べることはできないので、probabilism が校訂本作成の際にどのような役割を果たすかは明確になり得ない場合もあるとする。(p.9)

そこで Fulk はこれを考察する一例として、Kiernan (2000) の *Electric Beowulf*²⁸⁷ の場合を提示している。Kiernan (2000) は学術的な編纂にお

²⁸⁷ CD 版の *Electronic Beowulf* は、1999 年に初版が British Library から出た。Fulk が用いたのは 2000 年版である。その後、2004 年に第 2 版が、2011 年に第 3 版が、そして第 4 版はウェブ上 (<http://ebeowulf.uky.edu/ebeo4.0/CD/>)

ける probability の役割を考えるきっかけを与えてくれるからである。Kiernan の姿勢は、*Beowulf* は 11 世紀の作で、少なくとも詩の一部は写本の 2 人の写字生の内の一人によって作成されたものであるとする。写本への信頼性における疑問という点から、*Beowulf* の校訂者たちはあまりにも自由に本文を修正しすぎている。写本の一見間違いと思われるものはたいていの場合間違いではない。よって、「新しい真の保守的な校訂本の作成が必要だ」(Kiernan, 1981, p.278)と主張する。Kiernan (2000)は頭韻と韻律は写本の正確性を判断する際の根拠とはならないとし、hypermetric verses を削除している。しかしながら、hypermetric verses を避ける意味で、Kiernan (2000)は逆に不必要な修正を行っている。Kiernan (2000)は頭韻規則と同様に、統計的に規則性のある韻律規範を無視している。このような理由から、Kiernan (2000)の読みの多くが拒絶されるべきであると、手厳しい判断を Fulk は与えている。(pp.9-13)

Fulk の主張の根幹は、*Beowulf* における韻律上の規則性は絶対的なものであるということである。1 において取り上げられた *από κοινοί* の場合も、詩人がその統語的構造を意図したのかどうかという論争は、解決できない意見の相違とするのではなく、韻律の統計的な例証により判断が容易になされると断定している。また本文編纂のようなフィロロジカルな実践は、統計的な規則性の上に根拠が置かれるべきで、例えば、校訂者は韻律的な確率性を無視してはならないとする。(p.25) Fulk の見解の力点は一貫してここにある。

2005 : R.D. Fulk (I)

盛んに本文批評の問題を提示してきた Fulk であるが、今回の論文²⁸⁸もその一線上にある。本論の成果は、Klaeber の *Beowulf* 第 3 版 (1950)

main.html)に、2016 年から公開されている。

²⁸⁸ 'Some Contested Readings in The *Beowulf* Manuscript'. *The Review of English Studies*, New Series, Vol. 56, No.224, (2005), 192-223.

を改訂するに当たり、最も異論ある写本の読みを全て決定するという実践的的目的を持って再検討されたもので、現在論争点にある読みへの寄与と、また新しい版(Klaeber⁴, 2008)に採用されるであろう読みの説明を与えるものとして、本論の提示がなされている。取り扱われている不確定の箇所は、久しく対象となってきたもの（例えば写本上著しい損傷を受けた二葉：folio 179r と 198v）と、近年の Kiernan による *Electronic Beowulf* (2000)によって新たに生じた問題である。Fulk は後者の問題について、以下のような見解を与えている。

Electronic Facsimile は従来には見られない程の証拠を与え、新しく強く説得的な写本証拠の分析を提示している。しかし同時に、明らかに誤った主張も展開されている。例えば、Kiernan がパリンプセスト (palimpsest) と見なした folio 179 に現れる insular *s* のように見えるものは、off-stroke を失った *r* であるとし、また *o* と思われるものは、実際 tail を失った *a* であるといった Kiernan の読みはあり得ないであろう。これらの文字は他の文字を見易くするために stroke を落とす必要があったからである。またテキストが難解な多くの箇所で、頭韻と韻律の詩形式の崩れがあるというのもあり得ない。それはたまたまの偶然の一致である。*Electronic Beowulf* は論争点の解決というよりも、多くの新しい問題を引き起こしている。(pp.192-3)

このように述べ、写本の再度の新たな調査が最善であることを指摘する。Fulk は問題とする 71 箇所を再検討している。その内の数箇所を紹介する。(フォリオ(fo.)の最初の番号は Zupitza 第 2 版 (1959)、後のものは 1884 年の再丁付(refoliation)時のものである。<>内は新版 Klaeber⁴における読みを示す。)

Verse 44b, fo. 129^v (132^v) line 19: < þonne >

MS では pon. Klaeber 以前の校訂者は þonne に修正。than を意味する接続詞の短形 þon も稀ではあるが他作品に現れる。þon の読みは韻律

上からも支持される。(Kiernan (1984)²⁸⁹はこの箇所にかすかな略語記号があると認めている。) (p.193)

Verse 47b, fo. 130^v (133^r) line 1: <gy(l)denne>

geldenne か gyldenne か。保守派は Thorkelin (1787)の転写本に基づき gel とするが、e は Thorkelin (1787)の付加。(Kiernan(1999)は y の lower tip が g の下に見えると言う。) (p.194)

Verse 747b, fo. 147A (131^r) (149^r) line 6-7: <ræhte ongēan >

ræhte ongean は韻律的に受け入れられる verse ではない。Zupitza (1959)はこれらの語の前に 5 文字分の削除があったとし、最初と次の文字は h と a であるとする(ha__)。Fulk は Kiernan (1999)が ha ではなく he と読んだことに同意し、he hi__ ræhte ongean と読んでいる。(p.194)

Verse 762b, fo. 147A (131^v) (149^v) line 1: <(hw)ǣr>

hwær か pær か。r の descender (並び線より下に延びた部分)が左に傾いている。これから文字配置を考えると、pær では 1 文字分短い。hwær の読みの方が妥当。(pp.194-5)

Verse 1382a, fo. 160^v (163^v) line 4-5: <wundnan>

wun/dini または wun/dmi か。Kiernan (1981: rev. 1996)は dmi。Kiernan (1999)の ultra-violet 画像は dini を写し出している。i と n の間の連結がないのは、インクの褪せであろう。故に、m となっていないというのは、客観性が示す事実と反し、推論による読みを認めることになる。Jacob Grimm (*Deutsche Grammatik*, vol. iv., Göttingen, 1837)は、wundini は ‘archaism’ (初期古英語のグロッサリに見られるような助格あるいは所格を示す)と見たが、Kiernan (1981: rev. 1996)は詩の言語の古さを主張することには反対。wundini は archaism ではありそうにない。(p.196)

Verse 1471a, fo. 162^v (165^v) line 1: <-mǣrðum >

Thorkelin は mærdam, Madden (1824) / Thorpe (1855)は mǣrðum, Zupitza

²⁸⁹ ‘The state of the *Beowulf* manuscript: 1882-1983’ in *Anglo-Saxon England* 13. Ed. by Peter Clemoes et al. (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), p.25.

(1959)は *mærdum* と読む。Kiernan (1999)は *d* ではなく *ð* と判断する。恐らくそうであろうが、Kiernan (1999)の画像では認識できない。(p.196)

次に、損傷した葉のところに移ろう。198^v (201^v)はひどい損傷を受けている。この葉に対して従来いろいろな見解が与えられてきた。例えば、この葉で読むことのできる文字は、後の者の手による‘freshening up’であるというものや、自然に写本ページの傷みが進んだことによる文字の不鮮明が生じたといった指摘である。その後、Westphalen (1967)以来、ここのページの多くが後の者の手、即ち *Beowulf* 写本を転写した第二の写字生により復元された(‘restored’)とする見解が定着してきている。(p.201)

Verse 3150b, fo. 198^v (201^v) 1: <(Ġ)at(isc) meowle>

Zupitza (1959)は *meowle* の上の周辺部に‘old woman’を意味するラテン語の *anus* の省略形 *an*’と見なしたものを提示している。これに対し Pope (1966), Westphalen (1967), F.C. Robinson (review of Westphalen (1967) in *Anglia*, 88, (1970) 363-8)は異論を唱えている。*meowle* に先行する文字は *geo* ではなく、*geatisc* であろうという現在の一致した見解により、Zupitza (1959)の読みは認められていないが、Kiernan (1999)は Zupitza (1959)の読み of the *an* を保持し、それを行間に示した訂正とみて、*Geatisc anmeowle* との読みを提示した。Fulk はこの読みは頭韻と韻律に基づいていないとして、反論を受けているとする。Fulk が行った写本の直接の調査によると、すでに Robinson (1970)が指摘したように *meowle* の上に *m* が書かれていることが認められている。Fulk はこの上部の文字は、単に書き損ねた *m* の文字を書き改めたものであると断定している。(p.202)

続けて葉の 179^v (182^v)を取り上げている。ここは 198^v よりももっと状態が悪い。ある理由でここの原文は、第二の写字生あるいはかなりの技量を持った他の者によって、洗い落とされかつ書き直されてしまったように思われる。しかも 178^v の本文の裏写りもある。よって本文の復元には多くの推論を必要としている。書き直されたとされる文字

は、元々の文字を単になぞることを意図したものであると多くの者が捉えているのに対し、Kiernan(1981)はこのページはパリンプセストと見なし、ここに書かれた本文はオリジナルのものとは異なるとする。²⁹⁰ しかしながら Fulk は、Kiernan(1981)のこの見解は容易にはテキストの現況とは相入れないとする。というのは、recto には多くの空欄があり、これは修正者(*retoucher*)が判読できた元の文字をなぞったものの、できなかったところは空かしたままにしたと判断しているからである。(pp.208-9)

Verse 2226b, fo. 179^r line 19: <sōna (*in þ*)ā tīde >

sona mwatide という写本の読みは疑う点はないが、どのように修正するか、これは古書体学上の疑問点である。Klaeber³(1950)は“hopelessly corrupt”(p.84, footnote)として修正を拒否している。Thorpe(1855)は sona inwlatode としているが、後者の語は a hapax legomenon となり、かつ韻律を壊している。ここでは Sievers(1885 & 1893)のタイプ D の double alliteration (前半行に2つ)を必要としているからである。しかしこのタイプは off-verse には通常起こらない。Holthausen(1905)の sona he wagode (dragon に言及)は韻律的には申し分ないが、wagian ‘to totter, shake’は生物主語を他資料でも取っていない。この読みは写本の証拠にかなりの修正を施してしまっている。Sedgefield²(1913)は sona þæt geiode と Sedgefield³(1935)は þonan (s)wat (i)ode (Fulk は þonan swat geiode (third edition)としているが、これは誤りである)、L. Whitbread(1942)²⁹¹は sona him witad (韻律上不備あり)、Dobbie(1953)は sona onfunde とする。Mitchell-Robinson(1998)の sona him þa tīde は古書体学的に Wyatt¹⁻²(1893-1908)の sona getid[d]e の改良であるが、getid[d]e に代わる getide の綴りは特異である。この動詞は West Saxon の新造語のように思え、韻文ではどこにも用いられていない。Kiernan(1999)の

²⁹⁰ Kiernan は、“The text on fol. 179 is a late *revision*, not a *restoration*.”(1981: rev., 1996, p.211) と述べている。

²⁹¹ L. Whitbread, ‘Beowulfiana’, *Modern Language Review*, 37 (1942), 480-4: 483.

sona [o]nwa[ca]de ‘immediately watched over’は、韻律上異論はないものの意味的には疑問である。写本の読みを最小の変更となしている者は、Ludwig Ettmüller (1850)²⁹²の sona in þa tide (2027)である。写本の m は in として新解釈が与えられ、þ の ascender (x の高さより上に出る部分)は加筆修正されなかったと推論される(ここの þ の言及は、mwatide の m、即ち wynn のことを指していると思われる) in þa tide の表現は Gregory’s *Dialogi* の古英語訳で2度用いられている。Beowulf のこの箇所の意味は、‘and the guilty man penetrated therein straightway at that time, so that terror arose for the visitor’となる。Fulk は Ettmüller (1850)のこの読みを支持している。(pp.216-8)

Fulk は色々な観点から、写本に密着した検討により、まだまだ本文の特徴の多くを知る余地があるとする。Ettmüller (1850)のような古い校訂本における読みの再評価も重要であろう。

2007a : R.D. Fulk (I)

本論文²⁹³は、Klaeber³(1950)が試みた Beowulf の難問箇所(cruces)に関する見解を再検討することを目的としている。そしてこれらの考察が、改訂新版である Klaeber⁴ (2008)の中で採用される計画となっている。大抵の場合は、テキスト変更が是とされている。しかし、Klaeber³による読みへの疑問に対し解答が示されている場合もあるし、Klaeber³が決定した読みの確証が与えられている場合もある。本文自体の変更が提示されている場合と、特殊な語と一節に関しての Klaeber³の説明に変更が加えられているものがある。ある場合は、Klaeber³によって放棄された古い解釈が擁護されているものもあれば、新しい解釈が与えら

²⁹² Ludwig Ettmüller (ed.), *Carmen de Beovvlfī Gvftarvm Regis rebvs praeclare gestis atque interitv, qvale fverit ante qvam in manvs interpolatoris, monachi Vestsaxonici, inciderat.* (Tvrnici: Typis Zürcheri et Fvrreri, 1875).

²⁹³ ‘Some Emendations and Non-Emendations in Beowulf (Verses 600a, 976a, 1585b, 1663b, 1740a, 2525b, 2771a, and 3060a)’. *Studies in Philology* Vol.104, No.2, Spring 2007, 159-174.

れているものもある。検討された問題は全て長いこと、批評の対象になってきたものばかりである。(p.159) Fulk が取り上げたいいくつかの箇所を見てみよう。

Verse 600a: *snēdeþ*

Klaeber ³	ac hē lust wigeð, swefeð ond <i>snēdeþ</i> , tō Gār-Denum.	secce ne wēneþ (599b-601a)
----------------------	--	-------------------------------

Fulk 訳 [but he feels delight, puts to sleep and butchers, expects no resistance from the Spear-Danes.]

写本は‘sendeþ’だが、Klaeber³は‘*snēdeþ*’(<*snēdan*, *snædan*)に変更している。この読みは Hoops (*Kommentar*, 1932a)によって擁護されており、この点から Hoops は Klaeber³ への影響が大であると言える。(1 版、2 版は *sendeþ*). *snædan* が一般的綴りで‘to take a meal’として一度、*Peterborough Chronicle* (1048)に出る。*snædan* の‘æ’が *snēdan* として‘e’に綴られるのは、詩の中で唯一の例であるので、Klaeber³ の修正は難しい処がある。Klaeber³ は最終的にその Supplement (p.454)で、1, 2 版のように写本の語形に戻している。Holthausen⁴(1948)と Bammesberger (1999)は *snædeþ* とする。Mitchell-Robinson (1998)は *sændeþ* とする。ほとんどの校訂者は‘dispatches, sends to death’または、‘devours’の意味に解釈している。*Beowulf*の複合語、*forsendan* (904)は、‘to send away, to put to death’の意味であるが、単一語(*simplex*)としての *sendan* は古英語ではこのように用いられない。単一語の *sendan* をこのように解釈した校訂者のほとんども、Klaeber³ のようにやや躊躇気味な考え(“The force of this **sendan** is left to conjecture.” Klaeber³, p.151, Notes, 599.)を与えている。swefeð ond *snēdeþ* とはせず、修正なしに *swefeð ondsendeþ* とする

である。in nȳd- (Wyatt-Chambers¹, 1914); mid nȳd- (Holhausen⁴, 1913; Dobbie, 1953)と読まれている。後者は妥当性が低い。nīðgripe への修正の方がより安全である。これは Thorpe¹ (1855)によって最初に提示され、新しいところでは Sedgefield³(1935)に採用された。Kiernan(1999)もこの語形を採用している。ちなみに、Hans Jürgen Hube (2005)²⁹⁵もこの語形を受け入れている。Fulk は最終的に、nīðgripe を採用し、この修正形の方が balwon bendum (‘pernicious bonds’, 997a)の意味により近いと判断する。(pp.162-4) [Klaeber⁴: nīðgripe]²⁹⁶

Verse 1585b: to ðæs þe hē on ræste geseah

Klaeber³

Hē æfter recede wlāt;
 hwearf þā be wealle, wāpen hafenade
 heard be hiltum Higelāces ðegn
 yrre ond anræd,— næs sēo ecg fracod
 hilderince, ac hē hraþe wolde
 Grendle forgyldan gūðræsa fela
 ðāra þe hē geworhte tō West Denum
 oftor micle ðonne on ænne sīð,
 þonne hē Hrōðgāres heorðgenēatas
 slōh on sweofote, slæpende fræt
 folces Denigea fȳftȳne men,
 ond oðer swylc ūt offerede,
 lādlicu lāc. Hē him þæs lēan forgeald,
 rēþe cempa, tō ðæs þe hē on ræste geseah
 gūðwērigne Grendel licgan,
 aldorlēasne, swā him ær gescōd

²⁹⁵ Hans-Jürgen Hube, *Beowulf: Das Angelsächsische Heldenepos über nordische Könige*. Neue Prosäübersetzung, Originaltext, vergetreue Stabreimfassung. Übersetzung, kommentiert und mit Anmerkungen versehen von Hans-Jürgen Hube. (Wiesbaden, Marix Verlag, 2005).

²⁹⁶ Fulk (2010)の英訳は、“but pain has wrapped him tight in its insidious grasp, in deadly restrains;” である。

hild æt Heorte. Hrā wīde sprong,
 syþðan hē æfter dēaðe drepe þrōwade,
 heorosweng heardne, ond hine þā hēafde becearf.
 (1572b-90)

Fulk 訳 [He looked around the hall; Hygelac's thane, angry and resolute, turned then to the wall, lifted a hard weapon by the hilt—the blade was not useless to the war-hero, but he wished without delay to repay Grendel for the series of battle-attacks that he had inflicted on the West-Danes much oftener than one time, when he slaughtered Hrothgar's hall-comrades in their sleep, devoured fifteen men of the Danish nation on their beds, and bore off a like number as loathsome spoils. He paid him recompense for that, the fierce champion, to the place where he saw war-weary Grendel lying in repose, lifeless, as combat at Heorot had left him injured. The corpse sprang wide when he suffered a posthumous blow, a hard sword-stroke, and cut the head off him.]

1584 の *forgeald* ('paid back') を Klaeber³ は 'pluperfect' と分析する。そして *tō ðæs þe* の意味を Klaeber³ は 'to the point that, until, so that' としているが、詩でも散文でも実質的に 'so that' の意味はなく、いつも 'spatial' の意味で動作動詞と近接して共起する。Trautmann (1904) は *tō ðæs þe* を大胆に *þā* ('when') に修正してしまっているが、好ましいとは思えない。

Fulk の提案はこうである。*tō* を削除し、*ðæs þe* を 'after' または 'inasmuch as' の意味に解釈する。(Beowulf took vengeance on Grendel "after" he saw him lying there: he beheaded the corpse. [corpse とあるが、Beowulf が Grendel の首を切り落としたときはまだ、子の方の Grendel は生きていたという論争がなされた。Bammesberger (2002)]²⁹⁷) こうすると、いくつかの問題点が解決される。*folgeald* を単純過去にとることが許され、語りの流れがスムーズに行く。その上、1588b-1590a を挿入

²⁹⁷ Alfred Bammesberger, 'Grendel's Death (Beowulf 850-852),' *Neophilologus* 86 (2002), 467-69.

(Mitchell, 1980: 406) と考えると、*becearf* (1590b) の主語が *geseah* (1585b) と共有(=Beowulf)されていると考えることができる。挿入部があることで、*Grendel* に対しようやくのこと‘full vengeance’(首を切り落とす: 1590b)が成就できるという劇的効果が与えられる。しかし、写本に見られる *tō* を単に削除してしまってよいものかどうか、疑問が残るところである。いずれにせよ、*forgeald* を単純過去として捉えるのが最良と *Fulk* は判断している。(pp.164-7) [Klaeber⁴: *ðæs þe hē on ræste geseah*]²⁹⁸

Verse 1663b: oftost

ac mē geūðe ylda Waldend,
 þæt ic on wāge geseah wlitig hangian
 ealdsweord ēacen — oftost wīsoðe
 winigea lēasum —, þæt ic ðy wāpne gebræd.
 (1661-64)

Fulk 訳 [but the Controller of men granted me that I saw hanging beautiful on the wall a mighty, ancient sword — (he) has most often guided (the) friendless one(s) — so that I drew the weapon.]

1663b-64a を大抵の校訂者は挿入として、*wīsoðe* の主語を *Waldend* とする。が、これはぎこちなく、*oftost* はほとんどの場合、現在形の動詞と用いられ、*a gnomic expression* を示す場合は尚のことである。さらに *oftost* は韻律を損ねている。

Fulk の提案はこうである。*oftost* (‘haste’: f. nominative sg.)と読めば問題は解決する。典型的な写字生による間違いである。修正により韻律・統語・語りの障害という問題を解決できる。*oftost* が *wīsoðe* の主語と考えるならば、挿入と捉える必要もない。(pp.167-8) [Klaeber⁴: *oftost*]²⁹⁹

²⁹⁸ Fulk (2010)の英訳は、“after he saw (*Grendel* lying) in repose,”である。

²⁹⁹ Fulk (2010)の英訳は、“but the ruler of mortals granted me that I saw hanging handsome on the wall an immense old swords; haste guided the friendless man, so that

there shall occur for us further at the wall such as destiny ordains for us, the Lord of all men.]

ほとんどの校訂者は 2526b の *wyrd* を、2527a の *Metod* と並行に置いて主格と解釈しているが、*getēon* (‘to ordain’)の自動詞としての働きは十分に立証されていない。*wyrd* を対格と見なすべきである。意味は、“as the Lord of all allots destiny to us”となる。2525b は頭韻の不備から [furður] が補われている。但し Crépin (1991)³⁰¹は挿入していない。Bugge (1887)³⁰²の [feohte] も可能性がある。というのも、[furður] よりも統語上、主語が据えられておりより好ましい。その際の解釈は、“the fight will turn out for us just as God confers fate upon us.”である。(pp.171-2) [Klaeber⁴: [feohte]]³⁰³

最後に Fulk はテキストを客観的かつ正確に読む際の考慮すべき点を挙げている。音韻論・形態論・統語論・意味論・語彙論・古書体学・詩の韻律・頭韻・語りの文体・テキストを理解する上での文化的考慮などの考察を取捨選択的に行うことである。このような広範な本文考察を取り上げないなら理性的な判断は形成されないと言い切っている。(p.174)

2007b : R.D. Fulk (I)

Robert E. Bjork, John D. Niles とともに、Fulk が Klaeber’s *Beowulf* の

³⁰¹ André Crépin (ed.), *Beowulf. Edition diplomatique et texte critique, traduction française, commentaries et vocabulaire*. 2 vols. Göppinger Arbeiten zur Germanistik herausgegeben von Ulrich Müller, Franz Hundsnurscher und Cornelius Sommer, Nr. 329. (Göppingen, Kümmerle Verlag, 1991).

³⁰² Sophus Bugge, ‘Studien über das Beowulfepos,’ *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 12 (1887), 104.

³⁰³ Fulk (2010)の英訳は、“I do not intend to flee a foot’s pace from the guardian of the barrow, but it will turn out for us in a fight by the wall as the ruler of humanity allots destiny to us.”である。

第3版(1950)の改訂版、Klaeber⁴(2008)を出版する際に、前者に欠けていた「本文の取り扱いにおける原則の詳細な説明を示すこと」が提案事項の一つとされた。というのは、本文編集に携わるべき校訂者の役割が漠然としている、言い換えると、本文決定における適切な説明がなく、より大つかみな原則から本文決定をしていることが一般に他の場合にも時折見られるからである。Fulk は本論文³⁰⁴でその問題点を指摘し、Klaeber⁴(2008)に適用した原則を提示している。Klaeber³には確かに TEXTUAL CRITICISM (pp.274-82)の項目が与えられているが、この部分はほぼ韻律に関する事柄とある程度の頭韻についてと、それらの本文確立への関りが触れてあるだけで、“a detailed explanation of his editorial procedures”は与えていないと Fulk は述べる。しかしながら、Sievers (1885 & 1893)や Heusler (1925)³⁰⁵の理論を取り入れながら、本文批評を遂行する上で根拠となる韻律と頭韻の説明に注意を向けたことは正当であると見なしている。(p.134) 次に Fulk は本文修正の根拠として、Klaeber³が影響を受けた Hoops (1932a)と Hoops (*Beowulfstudien*, 1932b)に目を向けている。以下、その論点を述べよう。Klaeberにより全体で、80箇所ほどの言及がなされた Hoops は、Klaeber^{1&2}(1922¹; 1928²)のテキストの読みの保守性を讃えているが、本文はさらに保守的である必要性を考えている。Klaeber 自身は Sievers (1885 & 1893)の韻律論の規則性から離れることにより、本文の扱いをもう少し自由に行う方向を向いているとしている。Hoops (1932b)は詩人自身の言語の復元が校訂者の目的ではなく、また詩本来の韻律特徴の再構成が是非必要でもないと考えている。二人の注意深い写字生が唯一の写本の中で、10世紀末に韻律上標準的で許容できると見なしたものを受け入れ

³⁰⁴ ‘The Textual Criticism of Frederick Klaeber’s *Beowulf*’ in *Constructing Nations, Reconstructing Myth: Essays in Honour of T.A. Shippey*. Ed. by Andrew Wawn, et al. (Turnhout: Brepols, 2007), 131-153.

³⁰⁵ *Deutsche Vergeschichte, mit Einschluss des altenglischen und altnordischen Stabreimverses*, 3 vols (Berlin: de Gruyter, 1925), I.

ることで、良しとすべきであるというのが Hoops の主張である。純粋な韻律基礎に立った本文修正は認められるべきではないと考え、Klaeber に対しては、Sievers らが推奨する韻律上の修正のいくつかを取り去るように説いているが、Klaeber 自身は忠実にはそれに従うことはしていない。Hoops の見解自体も一貫していないと Fulk は指摘する。(p.143) これまでも触れてきたところであるが、Fulk は本文修正において“statistical basis”の重要性を常々説いている。これは特に、韻律における不備を見極める上での統計的基礎は、頭韻上・文法上の不備を見出す統計上の基礎と同等か、あるいはそれ以上であるとし、本文修正において一番信頼が置けるのは、韻律に基づいたのものであると主張する。(p.144) 但し、Klaeber⁴の校訂者たち全員が、上述の論理を必ずしも一貫して踏襲している訳ではない。第一に目的とするところは、Klaeber³で効率よくまとめられた多量の初期の *Beowulf* 学の有用性を残すこと、Klaeber の本文に対する一般的な原則を留めること、韻律のみに基づく本文修正は避けるようにしたという点である。Klaeber 自身が韻律に従って修正している部分は、そのまま残している。(p.144)

続けて Fulk は次のような見解を展開している。‘Critical edition’の務めは、不必要な修正を施さずにテキスト全体を保持すること、そして現代の読者にテキストを分かり易くさせることにあるとした上で、次のような *Beowulf* の本文上の問題の取り扱いを取り上げる。*Beowulf* 本文には、解釈の一致を見ない部分が存在する。例えば写本に見られる形態素は、我々が「語」と見なしている現代のような配列とはなっておらず、形態素間に様々な空きがある。これは語分割とパンクチュエーションについて、現代のものとの関りの問題が生じる。また、本文が明らかに損なわれている場合に、Thorkelin A (1787)と Thorkelin B (1787)による初期の転写の読みからその部分が補われている。このような *Beowulf* テキストの重層的な特質を認識することは、論理的にも教育的にも必要なことである。現代の読者は、仲介するもの(即ち ‘critical edition’)を持たずに中世の聴衆と同じ体験はできない。テクス

トは現代の読者をどういうところで、どのように拒んでいるかに光を当てるのが校訂者の義務であると述べる。(p.145) これらを考慮した上で本文修正が是とされることを認めている。特に、韻律の乱れの場合と同様に、写字生の誤解に基づく誤りの可能性が高いと考えられる場合に修正が必要であるとする。(p.148) 修正を施す場合であっても、施さない場合であっても、“editorial subjectivity”(p.150)を避けることはできない。それ故、考えられることごとくの校訂上の原則を公式化することは不可能であるが、Fulk は Klaeber⁴の校訂者が設定した次のような編集上のガイドライン5点を、本論の最後に提示している。掻い摘んで記そう。

1. 写本の読みから離れる箇所は、イタリック体、丸括弧、角括弧を用いて本文中にはっきりと表示する。消失した文字は18世紀の(Thorkelinによる)転写本に基づくこと。
2. 写字生が誤解や不注意により、実質的な誤りを犯したということを十分信じるに足る理由がない場合は、本文修正を行わない。誤解ではなく、写字生による本文変更の可能性がある場合は、‘underpointing’などの他の表示手段を用いる。
3. Klaeber がすでに認めている例を除いて、修正は韻律だけの理由では行わない。
4. 完全に書き落された詩行の再構成は、それにより意味が大きく左右される場合は、本文に与えることを避ける。再構成が許される場合は、大きく意味を左右しないとき、あるいは不鮮明な文字の内で判読できる部分から、十分なる推量の支持が得られるときである。
5. 不必要な修正はしない。但し、無修正がいつも好ましいとは限らない。個々の修正は文法・意味・頭韻・韻律・語り・古書体学的な確率を関連付けながら判断されなければならない。(pp.151-3)

韻律基準を重要視し、その確率を根拠に本文介入を是とする Fulk であるが、Klaeber⁴の編集方針では、それを強く全面に押し出している訳ではない。保守派の立場である Niles も共編者に加わっているからであ

るが、Klaeber³には明示されなかった「本文取り扱いの原則」が記されたことは意義深い。

(次号に続く)